

ラ・ボエーム第一幕に関する個人的考察

17D61---- 板垣 廉

一幕を見て私が気になったのは以下の点である。

それは、灰になったロドルフォの詩について。

これは根拠のない事ではあるが、冒頭でのロドルフォの戯曲に関する描写はボエーム全体のあらずじになっているのではないかと私は感じた。こう考えた時、第一幕戯曲の台本を燃やす描写での、「素晴らしい炎。しかしその輝きは長くは持たない。」はロドルフォとミミの恋の始まりを表していると考えられる。次に第二幕。「美しく色合いも完璧な青い揺らめきの中で燃える恋の場面が消えていく。」そして第三幕「ひと思いに火にくべられた原稿は、喜びの炎となって消えていく。」またここに関しては、対訳本の方では、「楽しき炎の中に消え失せる美しさよ。」とある。これがミミとロドルフォの恋の終わりを示唆していると考えられる。ただし、この考えには疑問点がある。それは、ロドルフォの戯曲が対訳本から考えるに一幕・二幕の後「今度は三つの幕をいっぺんに聞こうじゃないか。」というロドルフォのセリフから第五幕までであると考えられる点である。すなわち、作者が戯曲とボエームを関係づけるつもりがあったなら、戯曲も四幕しか存在しない事にするのではないか？という疑問である。また、さっき五幕があるのではないかということ述べたが、仮に五幕があったとしたならばその内容はミミとの恋が実るハッピーエンドな内容だったと思われる。だが、一幕でロドルフォが「この世にとっては多大なる損失」とまで言っている戯曲の台本を燃やしてしまったため、詩の神様の祟りを受けることになり五幕でハッピーエンドで終わるはずが悲惨な結末になってしまったのだろうと思う。

以上より、私が考える話の流れは以下の通りである。

ミミがロドルフォに興味を持ったことは、物語冒頭でのミミの最初のシーンから想像できる。ロドルフォは男4人で出かける前に社説を書き上げると言った。この会話の全容が下の階に住んでいるミミに筒抜けだったとすると、いわゆる「恋の駆け引き」はミミから仕掛けられたのではないかと考えられる。しかも物語の時間であるクリスマスイブには、単なる隣人に対する興味以上のものがあつたと考えられ、そうなる二人の駆け引きはこのときミミがイブにロドルフォしかいない部屋を訪ねようとした時から始まったと考えられる。そのため、ミミが部屋を訪ねた時にはすでにミミによるロドルフォに対するアプローチは始まっていたと考えられる。ミミが室内で鍵を落とし、それをロドルフォが隠し持っていたことが後々ミミにバレていたことを考慮すると、恋の駆け引きにおける主導権はやはりミミが持っていたと考えられる。また、二人の駆け引きにおいて、キスしようとするタイミングが2回ある。前の1回はミミの自己紹介の途中でロドルフォから。これは失敗。ミミが若干の距離をとったように見える。そして2回目のキスのチャンス。ミミが自己紹介した直後。この時はミミからキスしたように見える。おそらくこの時、二人の駆け引きが一步前進

したのだと思われる。この後ロドルフォは屋根裏部屋の仲間たちに呼ばれ、ミミは自室に帰ろうとする。その時ミミは扉の前で止まるのだが、これも第二の駆け引きの始まりと捉えらると、ここから第一幕の終了までの間にある、階段でのミミのロドルフォへの頼み事はミミがロドルフォを試したのではないかと考えられる。つまり「ロドルフォはミミが屋根裏部屋の仲間を取られるのを恐れて、一緒に行きたいと頼むミミの頼みを拒否してくれるか?」をミミは試したのである。

恋の発端はロドルフォであっても駆け引きの主導権はミミにあったとして考察の締めとする。